

# 魯迅と藤野巖九郎について(続)

## ——日中関係の一齣——

徳永重良

はじめに

1. 滞日後期の魯迅の文学活動 一補遺
2. 北京とそこからの脱出および新しい家族関係
3. 魯迅と藤野巖九郎の死
4. 魯迅に対する評価の変遷
5. エピローグ

はじめに

この論文は、文学作品の内容にたちいて分析することを意図するものではなく、それらが形成された背後にある社会的・歴史的背景や人間関係の連鎖に注目し、そのことを通して日中両国のこの分野における相互関係の一端を明らかにしようとするものである。筆者は、これまでに本稿とほぼ同様のタイトルで2編の小論を本誌24, 25号に発表してきた〔徳永重良(2015), 同(2016)〕。本稿はその続編である。それらの詳しいタイトルは、末尾の文献リストに掲げてある。

### 1. 滞日後期の魯迅の文学活動 一補遺

魯迅の滞日時代の仕事や生活などについては、すでに述べたが〔徳永(2015)〕、一つには紙幅の関係上、さらには筆者の浅学ゆえ、不十分にしか触れられなかった。とくに魯迅の滞日後期にかんする先行研究を十分に検討できなかった。この節では、まず、その点について不明をお詫びするとともに、若干の補遺と加筆を行いたい。

周作人は、魯迅が日本文学について、在日中、「当時は少しもちゅういせず、森鷗外、上田敏、長谷川二葉亭等、ほとんどその批評や訳文のみを重んじた。ただ夏目漱石は俳諧小説『吾輩は猫である』を書いて有名だったので、予才(魯迅)はそれが活字になるとすぐに続けて買って読み、また『朝日新聞』に連載されていた『虞美人草』を毎日熱心に読んでいた」と書いている〔周作人『周作人随想』、松枝茂夫訳(1996)〕。筆者はこれを額面どおりに受け取ってしまった。文学を詩、小説のみにとどまらず、思想、評論などの分野に広げれば、魯迅は滞日中いくつかの注目すべき作品を書き上げている。

魯迅の社会観の根底には、すでに来日以前からつよく影響をうけていた社会進化論——<sup>ソーシャルダーウィニズム</sup>——厳復を介して中国に紹介・導入された H. スペンサー、TH. ハックスレー等の理論——があり、それによって彼独自の中国社会についての救亡論が形成されていた。医学への道を断念し、《文芸運動》を本格的に始めようとした彼は、その後どのような文学思想に関心をよせ、自分の意見の立脚点に据えようとしたのだろうか。重要な手掛かりは、当時もっとも力を入れて執筆したと思われる「摩羅詩力説」(1908)、「文化偏至論」(同)(いずれも『魯迅全集』、1巻所収)——とくに前者——であろう。それゆえここではこれらの論文をやや立ち入って検討する。

「摩羅<sup>マロ</sup>」とはサンスクリットの音訳であり、仏教伝説のなかの悪魔を意味する。魔羅とも書く。英語ではサタン(Satan)のこと。ここでは始祖バイロンからはじまり、ハンガリーのペテーフイに至るロマン派の詩人たちをさす。魯迅はこの論文で彼らの生涯を紹介し、彼らが社会に与えたインパクトについて詳しく述べている。

まず冒頭で世界の文明史を鳥瞰し、中国社会の衰退の現状を憂える。その重要な原因として、中国では皇帝が「政治的理想」を、人の心を「攪き乱さぬこと」に求めている。すなわち「天才が現れると、…[人心を乱すゆえ]全力でこれを殺してしまう。また「他を知り、己をよく知り」、他と「周到に比較する」という自覚が乏しい。要するに「安穩な生活を偷み、進取の気性を憎む」という精神的風土が、瀰漫していることが問題の根源である。それと対照的に、「詩人は人の心を攪き乱すもの」である。とりわけ「摩羅派の詩人は人心を充分に攪き立てる力をもち、かつ言葉に優れて深い味わい」がある〔『全集』、1; 98~101〕。それゆえ、この派の詩の力によって人びとの心を覚醒させ、祖国の衰退を防止するためのテコにしたい、と言うわけである。これがこの論文の主たる意図に他ならない。

この論文が発表された約20年後、1926年末に、魯迅が論集『墳』を編み、「摩羅詩力説」など初期の論稿をそれに採り入れるにあたって、こう述べている。

「これが私の書いたものだろうか。…これがもし他人のものだったら、私はおそらく「割愛」をすすめたにちがいない」と。〔同、『墳』の「題記」〕。そして表現全体が「生硬で、晦渋<sup>かいじゆう</sup>」であるとも。

筆者は、27歳の青年の、覇気、才能、博識、憂国の情などを感じとり、驚嘆した。だが同時に、難解で、過度な思い入れ、スノビズムにはいささか辟易したのも事実であった。これは、青年期における詩論であり、*Sturm-und-Drang-Zeit* (疾風怒濤時代)の作品である。馬齢を重ねすぎた筆者が的確に評価できないのも当然であろう。むろん、これらの論考は文語体で書かれている。魯迅が旧世代の「読書人」としての文体と五・四以降の新しいスタイルとの双方を体験し、会得していることは、彼の文学を論じるうえで重要なことも付け加えておこう。<sup>1)</sup>だが、幸いなことに、伊藤虎丸、中島長文、北岡正子、山田敬三ら諸氏による優れた研究がすでにある。これらの先行研究に依りながら、(ありていに言えば「請け売り」)、自分なりに摂取し、考えたことを以下で述べることにしたい。

北岡正子の入念な研究によれば、「摩羅詩力説」にはいくつかの‘Source’、「材源」、つまり「種本がある」〔北岡正子(2006); 34 f.〕。たとえば、バイロンは、木村鷹太郎著『バイロン之大文界魔王』、バイロン著・木村鷹太郎訳『海賊』に依っており、シェリーは、濱田佳澄著『シェリー』に、プーシキンは、八木貞利著『詩宗プーシキン』に、それぞれ依っているというように。これらの「種本」は、ちょうど明治中葉に刊行されている。邦訳のない文献も使われているが、その利用法には、「その部分を切り取って、引用するかのような使い方」をしている〔北岡正子、(2006), (2015)〕。

材源の利用やストーリーの組み立ての際、そこには、自から取捨選択があり、魯迅の関心、価値観が反映されている。一例をあげれば、彼は、ロマン派詩人を特徴づける恋愛感情とかエロティシズムの問題をまったく捨象している（後述）。バイロンやシェリーは、イギリスという強国、つまり帝国主義的超大国の貴族階級の出身であり、思想史的には「ロマン主義的反逆」派の系譜に属する。あとで見ると、魯迅が傾倒したニーチェもこの系統に分類される。それと対照的な流れは、「合理主義的反逆」であり、これは革命を先導したフランス急進主義からマルクスに至る系譜である）〔バートランド・ラッセル(1970) 21章; 25章, McDougall(1971)〕

バイロンらはいずれも自らの恵まれた境遇や名声を捨てて、抑圧された他国（ギリシャなど）の民衆の解放や独立のために憤然と闘った戦士であった。ために彼らは、本国では当然、響きを買ったが、大陸では高く評価された。魯迅の関心も、彼らが被抑圧民族のために、人道主義的な立場に立って、積極的に行動し、彼らの自由のために尽力したことにある。ロマン派にまつわる華麗な恋愛物語や快楽主義については、一顧だにしない。中島長文はこれを魯迅による「エロティシズムの捨象」と指摘している〔中島長文(2001); 67 f.〕。取捨選択の価値判断の一つの現れである。（その理由については後述。）

同様な心情は、詩人たちの国の選択にも表れている。ポーランドのミツケヴィチ、ロシアのプーシキン、ハンガリーのペテーフィなど被抑圧小国（大国でも被圧迫者）に対して温かい眼差しが向けられている。この点は、すでに指摘するように〔徳永(2016)〕、『域外小説集』でも同様な選択基準が見られた。つまり、これら被抑圧国の状態は、当時、魯迅にとって祖国のそれと重なって見えたのではないか。彼が西欧の主流の文学をあえて選ばなかった理由である。

民族問題をふくむ文明論にかんする魯迅の当時の考えは、「文化偏至論」でも論じられている〔『全集』、1; 66 f.〕。この論文の方が解りやすいが、分析はやや図式的である。この時期の魯迅にとっては、物質文明に基づく、大国による小国の支配、後れた少数民族の圧迫、伝統文化の放擲など——文明の名のもとに、各国固有の価値や文化を一律に放棄させ、浅薄なものを取り換えようとする主張は、とうてい容認できないものであった。つぎのようにその懸念を述べている。

産業革命により物質文明の興隆がもたらされ、「世界の様相はにわかに一変し、人民の活動に一層利益をもたらした。…久しく恩恵に浴していると、物質文明に対する信仰がますますかたくなり、…/今日…あらゆる存在の根本であるかのように」（思われようになる）。「文明はかならず前人ののこしたのものにとづいて発展してきたので、過去の事物を矯正するために偏向を生ずることがある。今日の中国は、内情がすでに暴露され、四方から近隣諸国が競い群がっ

て圧迫を加え、いまや変革をせざるをえない状況にある」〔『全集』, 1, 「文化偏至論」; 72 f.〕

つぎの統計がはっきりと示しているように、産業革命以前には中国は、押しもおされもせぬ「経済大国」であった。それは世界の総生産の実に約三分の一を生み出し、単独国ではむろんトップのランク。ヨーロッパ全体（28.1%）より大きなシェア（33.3%）を占めていたのである！（下の表を参照せよ。）

表 世界の生産高に占める各国（または地域）の相対的なシェア 1750～1900年 （%）

	1750	1800	1830	1860	1880	1900
ヨーロッパ全体	23.2	28.1	34.2	53.2	61.3	62.0
イギリス（連合王国）	1.9	4.3	9.5	<b>19.9</b>	<b>22.9</b>	18.5
ハプスブルク帝国	2.9	3.2	3.2	4.2	4.4	4.7
フランス	4.0	4.2	5.2	7.9	7.8	6.8
ドイツ諸邦	2.9	3.5	3.5	4.9	8.5	13.2
イタリア諸国	2.4	2.5	2.3	2.5	2.5	2.5
ロシア	5.0	5.6	5.6	7.0	7.6	8.8
アメリカ合衆国	0.1	0.8	2.4	7.2	14.7	<b>23.6</b>
日本	3.8	3.5	2.8	2.6	2.4	2.4
第三世界	73.0	67.7	60.5	36.6	20.9	11.0
中国	<b>32.8</b>	<b>33.3</b>	<b>29.8</b>	19.7	12.5	6.2
インド／パキスタン	24.5	19.7	17.6	8.6	2.8	1.7

注）ポール・ケネディー（1988）上；231 ページから引用。（強調は引用者による）

中国の場合、清（満州人）という他民族による支配に加えて、過去における栄光からの凋落という二重の屈辱感を味あわされてきたのである。正義感の強い青年が、激しい危機意識、憂国の情を抱くのは当然である。では、どのようにしてそれに立ち向かうべきなのか？ 彼はいう。

「…第一に重要なことは人間にある。…人間を確立するための方法としては、個性を尊重し精神を発揚することがぜひとも不可欠である。」こう述べたあと、19世紀ヨーロッパにおいて発展をみた観念論哲学<sup>2)</sup>——ヘーゲルからショーペンハウアー、キエルケゴールなど——これこそが自我の確立にとって重要な考え方であるとし、とくにニーチェを高く評価している〔同；78〕。当時、魯迅は座右につねに『ツァラトゥストラ』を置いていたという〔丸尾常喜(1985)；87 など〕。「超人」、「意志の強さ」、「英雄の賛美」などは、ニーチェ哲学のキーワードであった。ニーチェへの傾倒ぶりに留意して欲しい。それは、「神が死んだ」あとに人間はいかなる相互関係を取りむすぶべきかという問いをめぐって展開された思想（実存主義哲学）の一の源流に魯迅が触れ、そこから一定の影響を受けたと考えられるからである。（この点も後述する。）さらに言えば、魯迅の民族主義、ナショナリズムは、真の危機を中国人の内面に見出したことであって、たんなる科学の立ちおくれ、軍事力の劣勢という次元にとどまるものではない。しいて言えば「文化的ナショナリズム」が問題なのである〔伊藤虎丸(1983)；62f.〕。

他方、「社会民主」論についての扱いは、まことにそっけない。「理想としては立派だが、…全体として凡庸に陥る」可能性があるとして、極めて否定的な見方を述べている〔同; 76〕。<sup>3)</sup> そこにはニーチェの思想——民衆を凡庸な「賤民」として捉える——ががよく反映されている。明治も後半になると日本でも社会主義思想が、西欧から、観念論とほとんど同時に紹介されており、また黎明期の労働運動も注目され始めていた。このような動向について魯迅はほとんど関心を示していない。のちに触れるように、彼自身、「革命文学論争」の渦中でこの思想に関わりをもつことになるのだが。

そして「貴族主義」にもとづく救亡の使命感、超人への待望、ロマン主義に傾倒していた当時の魯迅にあっては、どうして変革の主体を民衆に求めることができようか。彼の関心は、観念論哲学の系統的な摂取と、それと重なることだが、いかに近代における「個」ないし「自我」を確立すべきか〔伊藤虎丸(1983); 34 f.〕——それは、封建社会から近代社会への転換期において多くの個人が直面しなければならなかった葛藤である——という問題に収斂していたのである。20年代後半、「革命文学論争」において、彼は成り行き上マルクス主義文学論を学び、「階級」などの概念をも吟味することになる。B. ラッセルの分類によるところの「ロマン主義的反逆」派から「合理主義的反逆」派〔ラッセル(1970)〕へ接近ないし移行が模索されるのである。(この点も後述。)

ところで、ニーチェの思想の日本への導入は、明治中葉に何度目かの波を迎えたと言われている。当時、その重要な役割をはたしたのが高山樗牛であり、彼を中心に東京帝大関係者によって発行されていた『帝国文学』や『時代思潮』が論壇を賑あわせていた。魯迅がニーチェと個人主義の重要性に着目したのはこのような時であった。とくにこれらの雑誌に掲載された斎藤野の人(本名、信策)<sup>4)</sup>の論考には、魯迅が先に用いた「個人・個性の重視」、「人間の重要性」、「天才論」などのキー概念がすでに展開されており、斎藤と魯迅との間につよい近似性がみられる。魯迅は、とくにドイツの詩人ケルナーを論じた際、斎藤の論文をいくつかの箇所「材源」として用いたのではないかと指摘されている〔伊藤虎丸(1983); 28 f.、中島長文(2001); 20〕。ちなみに斎藤野の人は、高山樗牛の実弟であった。

以上、魯迅の日本滞在中の、思想のジャンルにかかわる活動にかんして具体的に見てきた。彼は当時の作家たち——とくに斎藤野の人らの評論家たち——をとおして、広義の文学について、一定の影響を受けたといえる。その意味で初期の習作には、当時の「時代の思潮」が反映されていることは明らかである。これらと帰国後の作品とのあいだには、むろん変化がみられるのは、当然であるが、それによって前者の思考の枠組みが消え去ってしまうわけではない。両者にはある意味で通底するものがある。<sup>5)</sup> 一例をあげれば、彼は事物をその外面から批判するだけでなく、その内部にあって見えにくい、より本質的な要因を抉り出し、そのうえで批判するという独特な方法を好んでとる。これを私は≪ **reflective criticism** ≫ (内的省察をともなう批判)と呼び、外的ないし一面的なそれ≪ **outside or one-sided criticism** ≫と区別する必要があると考える。彼がよく用いた≪ **reflective criticism** ≫という、より深い、説得的な批判の方法も、この時期にすでに胚胎されていたのであった。

## 注

- 1) 文語文には、改行や段落もなく、一つの物語が切れ目なしにだらだらと続く。そして場面を変えるさいには「当夜無話」のような無意味な語句をはさんで表現した。だから当初魯迅の小説の文体は多くの人に奇異な感じ、一種のショック——を与えたという。それだけ斬新で、必要不可欠な改革だったことが判る。〔今村与志郎(1990); 34~35〕
- 2) ここでの魯迅の観念論思想は、すぐあとで触れる明治中葉期の思潮、とりわけ斎藤野の人の論考から影響を受けている。
- 3) 後年、マルクス主義文学論にも深い関心をもつことになる魯迅は、この段階では、日本のこの種の思想や運動の萌芽にはほとんど関心をもっていない。というよりは、否定的な立場にあったことが注目される。日本における労働運動や社会主義思想の発達は、明治中葉によく「黎明期」を迎えたのであるから（たとえば、大河内一男（1952）、大内秀明・平山昇（2014）など参照）、魯迅がこれらに接する機会がほとんどなかったのは当然かもしれない。

一般に、ある思想の評価にさいし、それを時代の動向から切り離して論ずるのは適切ではない。あと知恵による批判は容易だが、それではその思想が形成された本質的理由が分らなくなるであろう。
- 4) 斎藤信策（野の人）は、明治 11（1874）年、山形県鶴岡町（現鶴岡市）の士族の生まれ。兄高山樗牛の実弟で、7歳ちがいであった。樗牛の盟友姉崎嘲風とともに『時代思潮』を創刊し、プーシキン、ゴーゴリなどの作家論を論じ、また「天才論」、「自由と個人主義」、「芸術第一主義」などの概念を展開した。魯迅が本郷界隈の下宿で《文芸運動》の構想を練っていた頃、野の人は、神田中央予備校でドイツ語を教えていたらしい。だが二人が会うことはなかったという〔中島長文(2001); 58〕。彼は、夭折した兄の著作を全集として編纂することに尽力する一方、評論家として活躍。が、野の人もまた兄と同じく結核に倒れ、1909（明治 42）年に亡くなった。享年 32 歳。
- 5) 増田渉は、こう書いている。「彼〔魯迅〕の初期の随筆にはニーチェ的な顔が大分のぞいている。晩年にもニーチェ主義はまだ多少は残っていたようだ、書くものの中にも少しそのあとがあるが、彼と対談している場合にはいっそうそれを感じた。」「増田渉(1970); 78〕。竹内好も魯迅が「ニーチェを酷愛した」と指摘している〔竹内好(1961); 72, 78〕

## 2. 北京とそこからの脱出および新しい家族関係

辛亥革命はまことに奇妙で、錯綜した革命であった。17世紀の初めからおおよそ 300 年間にわたって続いた異民族・満州人による支配体制、清王朝はこれによって崩壊した。代わって共和制である中華民国（南京政府）が成立。急遽亡命先の合衆国から帰国した孫文が臨時大統領に選ばれた。彼が就任直後に公布した「臨時約法」（1912 年 3 月）には、主権在民、人民の自由と権利という原則が高らかに掲げられた。<sup>1)</sup>

にもかかわらず、革命勢力の力は極めて弱体であり、この高邁な理念を実現するためにはあまりにも脆弱だった。統治の実権は袁世凱えんせいがいによって握られた（権力の連続性）。最後の皇帝ラスト・エンペラー（溥儀）は、退位後も 1924 年まで政権の保護のもとで紫禁城に住むことを許された。袁世凱は武力（北洋軍）をバックにしなが、共和制をできるだけ抑圧し、帝政の復活を画策。専制政治を指向した。こうした独裁政治に対する不満は、第二革命（1913 年）を引き起こしたが、袁世凱によって簡単に抑圧され、孫文は再び日本への亡命を余儀なくされた。袁世凱が 1915 年、突然、病死すると、後任

に同じく軍閥の段祺瑞<sup>だんきずい</sup>が就いた。彼もまた議会政治には消極的であった。日本政府はいち早く段政権を支持し、借款をあたえた。大まかに言うと、新政府は南部に一定の影響力を保っていたものの、北部地方はさまざまな軍閥の支配下に置かれていたのである。そして各軍閥の背後には、列強各国が控えており、自国権益の維持、拡大を図っている、という複雑な構図であった。<sup>2)</sup>よく言われているように「文学革命は成功したが、(孫文の)政治革命は失敗した」のである。そして孫文も1925年、交渉のため滞在中の北京で客死した。「革命はなおいまだ成功せず」という有名な言葉を残して。――

革命は未完だが、いな未完であるがゆえに、社会にも個人にも著しい変化と混乱とがもたらされた。魯迅一家について言えば、既述のように〔徳永(2016)〕、彼は新政府の教育部の官吏(僉事<sup>せんじ</sup>という課長相当の管理職)になり、北京に移り住むことになる。はじめ単身赴任。およそ7年後の1919年には、紫禁城に近い八道湾<sup>はちどうわん</sup>に敷地500坪ほどの屋敷(伝統的建築である四合院)を購入し、母親、妻朱安に二弟の作人とその家族、三弟の建人ら呼びよせ、紹興のとくと同じように再び一緒に暮らすことになった。こうして、一家が「共同体」としてともに生活できる住宅を確保できたことは、家長として責任感のつよい魯迅にとって、肩の重荷をおろしたような安堵感、充足感をあたえたであろう。

だが、このなごやかな状態は、長くは続かなかった。魯迅と弟の作人の間が突如、不和となり(1923年7月)、魯迅が別居することになったからである。不和の真相は、両当事者が語らないので不明である。しかし許寿裳、郁達夫らの親しい人たちの意見を勘案すると、作人の妻信子の浪費癖・放漫な家計とそれを制御できない作人の不甲斐なさ、性格に起因するものと推察される。<sup>3)</sup>

兄弟は、考え方に違いがあるもののこれまで仲が良く、ともに「文学革命」の旗手として活躍してきたが、突如不和となり、兄はせっかく獲得した八道湾の家を去った。魯迅が描いた家族というバラ色の共同体はあっけなく崩壊し、以後この二人が和解することは生涯なかった。魯迅の死に際しても作人は北京に留まり、兄の葬儀に参列しなかったという。

つぎに魯迅後半の人生に対して重大な関わりをもった一女性、許広平(1898～1968)との関係に触れなければならない。彼女はこれまでの周一家、とくに魯迅・朱安夫婦関係にとって、あたかも闖入者のように突然現れたのだった。<sup>4)</sup>

きっかけは、許広平が、大学当局の学生指導や学生運動に対する因習的対応などに対する不満、および若者に特有の不安や悩みついて、師の魯迅に手紙を書き、指導を仰いだことであった。それに対して魯迅は丁寧な長い返事を書いた。こうして往復書簡が始まった。最初の手紙のやり取りは1925年3月。最後は1929年6月で終わる。周知のように、この往復書簡は『兩地書』として出版された。本として出版されたのは、1933年で、書かれた時から4年ないし8年後に公刊されたことにな



写真1 許広平像

注 許広平(1898～1968)のちの魯迅夫人  
出典：北京魯迅博物館(2003)

る。全部で 135 通の手紙が『兩地書』に収められている〔『全集』、13；解説〕。

以下では、a)なぜ『兩地書』は公刊されたのか、b)師弟関係から恋愛、さらに夫婦関係へ、c)魯迅の性格についての自己診断、d)家族のその後、の四つの項目に絞って、『兩地書』を中心にしながら魯迅の家族関係の動きをフォローする。

#### a) なぜ『兩地書』は公刊されたのか？

この種の書簡集は、著者の死後、公刊されるのが普通であろう。まだ当事者が生きていた間に、私信——ましてや教え子、恋人、そしてのちの「妻」あての私信、つまり魯迅自身がいうように“ラブレター”——を出版するのはごく稀なことであり、相当な覚悟が要るはずだ。広告をみて「往復書簡」の刊行予定を知った周作人は、兄は発狂でもしたのかと驚いたという〔周作人(1996)〕。それほどショッキングなことだった。許広平との関係は、世間では恰好なスキャンダルとして取り上げられ、彼らは長い間じっとそれに耐えなければならなかったのである。

たしかに普通ではない。だが、魯迅にすればそうするだけの理由があったのだ。彼は、1927 年以来、許寿裳のあっせん中央研究所の特約研究員であったが、31 年末でこの職を解かれた。月 300 元といういい収入源の喪失。彼としては、他に安定した所得を確保する必要があった<sup>5)</sup>。すなわち、一つには経済的な理由である。しかし、ただそれだけではあるまい。魯迅は、この本の「序言」(1932 年 12 月 16 日)で出版社の申し出を受け入れた理由について、つぎのように書いている。—

「この六、七年を回想すれば、わたしたちをめぐる風波も少なくはなかったと言える。たえざるあらがいのなかで、助けてくれた者もあるし、背後から石を投げたのもおり、笑罵誣蔑した者もある。だが、わたしたちは歯をくいしばり、もう六、七年もあらがひながら暮らしてきた。…この一冊の書を自己の記念とするとともに、また、これをもって好意の友人に感謝し、そして、わたしたちの子供への贈物としたい。いつかわたしたちの歩みの真相が、おおむねかくのごときのものであったことを知らせるために。」〔『全集』、13；8〕

出版のおもな理由は、以上でほぼ明らかであろう。だが、それだけだろうか。より立ち入って法的関係について言えば、朱安との婚姻関係は依然として続いておりで、離婚はしていない。離婚は母親との関係で事実上不可能だった。許との同棲、共同生活は、結局「納妾」ということになる〔中野美代子(1980)〕。「納妾」は、「重婚」という民法上の違法にはあたらないものの、そのような状態は、二人にとってはとても耐え難いことであつたに違いない。当時、一夫一婦制に対する通念は、中国の知識人の間における方が、日本の場合に比べ牢固としていたので〔代田智明(2006)；200〕、とくに魯迅は、内心忸怩たる思いというか、つよい負い目を感じていただろう。そのためにも、往復書簡<sup>パブリッショ</sup>を出版し、真の愛情の証を示すとともに、事情を弁明する必要があつたと考えられる。これこそが公刊の最重要な理由だったのではなからうか。当然のことだが、出版に際し周到な加筆・推敲がなされている。

## b) 師弟関係から恋愛、さらに夫婦関係へ

許広平は、広州の旧家の出身であり、父親が生後まもなく決めた許嫁との結婚をどうしても受け入れることができなかった。長い年月をかけてようやく婚約を解消し、家を出、天津の師範学校で学ぶ。さらに北京女子師範大学で勉学をつづける当時 27 歳の学生だった。自治会の委員も積極的に務める活動的な学生であった。他方、魯迅は役人でありながら、すでに作家としての社会的地位を確立しており、非常勤講師として北京大学、北京女子師範大学などでも文学史などを講義するという多忙な日々を送っていた。当時 45 歳で、二人の間には 17 歳の年齢差があった。

はじめにモーションをかけたのは許広平である。最初の手紙【1】<sup>6)</sup> (1925 年 3 月 11 日付け) で、彼女は師に尊敬の念を払いながらも、率直かつやや強引に自分の疑問や要望を投げかけ、魯迅に指導を仰いだのである。若干、猪突猛進的な感じだが、同時に才気煥発な彼女の性格が、この手紙からもうかがい知ることができる。

これに対して魯迅は、手紙を受け取ったその日につぎのような長い返事【2】を書いている。広平はペン書きだが、魯迅の手紙は毛筆で。広平の人生における悩み、苦痛、いかに生きるべきか、など——に対して、彼は自分の経験を例に挙げながら、丁寧に答えている。

**【2】**…もしわたしにほんとうに青年を指導する力…があれば、決してかくしたりなどしません。だが残念ながら、自分でさえ指針がなく、いまもってなおドタバタしている始末です。…参考までに、わたし自身が…いかに世の中をやりすごしていくかの方法を書いてみましょう。

一、「人生」の長途に行くに、もっとも出っくわすものに二大難関があります。その一つは「岐路」です。墨翟先生なら慟哭して引き返したと伝えられます。だが、わたしは哭きもせず引き返しもしません。まず岐路に腰をおろして一服し、あるいは一眠りし、そこで行けそうな道をえらんでゆきます。…その二は、「窮途」です。わたしはやはり岐路のばあいと同じように、乗り越えて、荊棘のなかでも、とにかくすすみます。…〔強調は引用者のもの。以下も、断りなき限り同様〕

二、社会に対する戦闘で、わたしは決して身を挺してとび出しません。わたしが他人に、なにかを犠牲にするようなことを勧めないのもこのためです。欧州大戦のときは、もっとも「塹壕戦」を重んじました。…中国では、…こうした戦法が必要なのです。…要するに、苦悶に対するわたし自身のやり方は、もっぱら來襲する苦痛ともみあい、無頼的手段でもって勝利となし、むりに凱歌をあげ、それを楽しみとすることです。…/(3 月 11 日付け)

一学生の手紙に対し魯迅は、じつに親切かつ真摯に答えている。朱安とはこれまで交わしたことがない、若い異性とのあいだの知的なコミュニケーションにいくぶん喜びをおぼえたのだろうか、魯迅の筆は滑らかだ。自分の問題処理法を語り、しかも自説を押し付けのでもなく、広平が自分で考えるのを促すような仕方ですべて述べている。これに対して許広平は 3 月 15 日付けの手紙【3】で、「…私は小学校のころから今まで、まさしく人に「傲慢」だ、「不恭」だと言われなかった日とてありません。」と自分の性格の一端について述べている。利かん気は、すでに幼児期から自他ともに認め

るところだったようだ。

魯迅は手紙【8】で、広平の煩悶の原因がその性急な考えにあると指摘し、今の中国では、それが彼女の苦悶を大きくしているのではないかと忠告している。「ラブレター」なのに、普通の愛情の表現はほとんど見当たらない。だが、許は親しさがまずにつれ、また厦門と広州とお互に離れて住むようになってから、魯迅の食事、日常生活全般にかんして、事細かに注意し、愛しい人の健康に十分気を配っている。具体的には、たとえば深酒の中止、節煙、過度に香辛料を取らぬこと、等々。とくに食事に気つけるよう再三書いているし、彼のためにセーターを編んでいる、とも伝えている。(たとえば、【33】、【49】、【51】、【74】など参照。) 学生から主婦への変身! 他方、魯迅もそれに対し、深酒やタバコの吸いすぎを止めるように努めており、また栄養剤(キニーネ、サナトキン [滋養健康剤])を愛飲しているなどと、許の忠告を採り入れようと努めている、と書いている。(【41】、【45】、【54】、【62】、【86】なども参照せよ。) 効果のほどは分からぬが、とにかく努力しようとしていることは確かだろう。

ところで、魯迅は、迷っているこれからの道、今後の三通りの身の処し方について、許につぎのような重大な相談をもちかけている【73】。広平の気持ちを今一度サウンドし、それによってためらう気持ちを断ち切り、自分を奮い立たせたいという意図がそこに感じられる。

(一) 心を灰にして、何文か銭をたくわえ、以後はどんなこともやらず、自分のことだけを考え、かつかつ日をすごす。(二) また自分のことは考えず、人々のために仕事をし、以後餓えようともかまわず、また他人の唾罵するにまかす。(三) もう少し仕事をし、もしいわゆる「同人」までが背後から銃撃するようなことがあれば、生存と復讐のため、何事でもやってやる。……それで手紙を書いて友〔つまり広平—引用者〕と相談し、ひと条の光を与えてもらいたくおもうのです。…

これに対する広平の返事は、つぎのとおりきっぱりしており、凜としたものを感じさせる。ここでは師弟関係がまるで逆転したかの感がある。魯迅に対しこれまでのやり方とはっきりと決別し、新しい(三)の道に伴う危うさは二人でともに担ってゆけばよいのではないかと忠告する。なぜなら(一)は、目下厦門で実行中であり、(二)は、北京で何年もすでに試行してきたことだからに他ならないから。

【82】…お手紙(【73】)の最後で、三つの道についておっしゃって、「ひと条の光」を求めておいでですが、私自身はやはり世俗の人間で、…何から申しあげてよいやらわかりません。…旧社会はあなたに苦痛な遺産を残しましたが、あなたはこの遺産に反対なさりながら、一方これを遺棄しようとはなさりません。…ただ、第三の方法しかありませんが、やはり疑問〔があり〕…その危うさが知れます。でも、私たちも人間であって、だれも私たちだけを苦しい目にあわせる権利はありませんし、私たちも苦しみを受けなければならない義務もありません。一日生きることができれば、一日人事を尽くし、生活を求める、つまり努力してやって行けばよいの

だとおもいます。

広平の、このきっぱりとした返事—新しい共同生活をとるべきだとする意思表示とそれに伴う困難克服のための心構え—は、彼を長年の迷いから救い出し、魯迅に「ひと条の光」を与えたことは確かである。彼はつぎのより大胆なステップに進む確信を得たと思う。

つぎの【112】を魯迅はわざわざ書留で出している。重要なメッセージを確実に伝えたいためである。

「以前はたまに愛ということに考えがおよぶと、たちまちその資格はないだろうとおもって、自ら羞じたもので、したがってある人を愛そうなどとしなかった。だが連中の思想言行の内幕を見きわめたことは、わたしに自信を与えました。自分は決して自分を貶め抑えるには及ばぬ人間である、わたしは愛することができるのだと」。〔1月11日〕。

これはまさしく魯迅の広平に対する明白な「愛の告白」であると言える。かねてから廈門大学の同僚たちの俗物ぶりにうんざりしていたところに加え、彼が才能を高く評価していた若い門弟・高長虹が、広平に片想いしており、彼女に対する失恋の恨みから、一転魯迅を揶揄し、誹謗する詩を発表したことを知ったのである。〔三宝政美(1988); 66~67; 藤森節子(2014); 213〕。魯迅はこのような連中を「卑怯の至り」と罵倒している【112】。こうして、彼は長年とってきた、愛についての控えめな態度を変え、より積極的に自分の気持ちを表すことに踏み切ったのである。

母親のきめた朱安との「愛なき結婚」は、魯迅にとって深刻で、容易に拭うことのできないトラウマであり、そのことが長い間、彼がエロティシズムを正面から論じることをタブーとみなす真因だったのではなからうか。魯迅は結局、結婚について自分の考えを貫けなかったという蹉跎にかんし広平にこう弁明している。「私の一生の失敗は、これまで自分の生活のことをかんがえなかったことにある」【82】、と。母、朱安、広平の三人の女性の間に立って、全体として穏やかな関係が保たれるにはどのようにすればよいのか、という問題は、彼にとってアポリアであった。人に聞かれると、「朱安は母親がもらってくれたのだから、母親にあげた」と、冗談めかして答えたというが、それがけっして満足な答えでないことは、彼自身が最もよく知っていたはずだ。

広州の中山大学での、これまた短い勤務を終え、魯迅は上海へ移転することを決意した。この年4月12日、上海で蒋介石による凄惨な「クーデター」が強行され、多くの労働者、共産主義者が虐殺された。数日後には広東でも同種の、国民党による凄絶なテロがみられ〔丸山昇(1976)が詳しい〕、中山大学学生からも逮捕



写真2 魯迅の家族  
左から魯迅、海嬰、許広平  
出典：北京魯迅博物館（2003）

者がでた。彼らの救済を主張した魯迅の意見は同僚の賛同をえられなかった。魯迅はこれを不満とし、最終的に大学を辞め、広平とともにひっそりと、上海へと向かった。そこで二人はようやく同棲し、新しい生活をスタートさせた（1927年）。そして上海が彼らの終の都市となる。

のち北京に母親を単身で見舞いに行ったとき、なぜ広平と一緒に来なかったのかと聞かれ、彼は広平が身ごもったことを打ち明けた【118】。母親がそれを聞いて、喜んだことは言うまでもない。

### c) 魯迅の性格についての自己診断

『両地書』で魯迅はところどころで自分の性格について述べている。彼の文章は一般に難解なのであるが、これは分かりやすい、貴重な自己分析である。これらの中からいくつかを抜き書きしてみる。自分を内向的で、「暗い」と述べており、性格の「暗さ」については再三触れている。

「要するに、わたしの、自分のための想定と他人のためのそれとはちがうのです。理由は何か。**わたしの思想があまりに暗すぎるから**、だがそれも、いったいほんとうに正確なのかどうかも知ることができない、だから自身で試験してみるしかなく、他人を招待する勇氣はないのです。」【12】

そして自分は、運動の指導者、統率者としての資質・条件に照らすと、それに不向きであること、それを十分自覚しているとして、つぎのように分析している。

「私になにかさせたいと思っている人も、何人かいますが、**わたし自身はだめだということ**がわかっています。およそ指導者になる人は、一に、勇猛でなければなりません、わたしはものごとを見るのがあまりに細かすぎ、細かすぎると疑い深くなり、勇往邁進しにくくなります。二に、犠牲を惜まずでなければなりません、わたしは、わけても**他人を犠牲にしたくない**（これはしかし、革命以前のさまざまなことがらに刺戟された結果です）ので、やはり大局を開くことはできません。」【8】

彼は、他人を自己の考えにまき込み、犠牲にすることができない、耐えられないのである。集団より孤独、独立を好む。李長之はこれを「群」への嫌悪感と指摘している。李はこの点をさらに拡大して解釈し、魯迅は、「社会生活が上手くできない、ここには、あの「人は生きなければならない」という単純な生物学的信念があったから（生存できた）にほかならない。…魯迅にはいかなる深遠な哲学的思想もなく、かりに根元的な何かがあるとすれば、まさにこの生物学的信念だった。」とまで言っている〔李長之(1990); 222, 208〕。魯迅は、このような若手の辛辣な批評にも、「李はもっとよくものを見るべきだ」とコメントしているが、ずいぶん寛大である。自分の本に載せたいという李の要望に応じて、自分のポートレートを与えている。

魯迅が批判的精神の持ち主であり、権力や権威に媚びたり、なびいたりせず、相手が何であろうと不条理ならば、はっきりとその非を指摘する。そして徹底的に批判し、決してそれらに屈しなかったことは、よく知られている。彼は内向的性格であり、自分の思想を広め、実現するために組織をつくることには極めて消極的であった。そこには己の性格をよく知っていた、醒めた自覚があったからであろう。

最後に、エピソードを一つ。筆者はミュージカル「マイフェアレディー」を観たとき、突飛なことだが『両地書』を連想した。両者は背景も国柄もまるで異なる。前者はバーナード・ショウの戯曲（Pygmalion）が原作。つまり創作だが、後者は事実に基づいている。いささか強引な連想であることを認めたくえで、こう思う。— 第一級の教育という行為は、人の心を揺さぶり、大きく変え得るということ、そして場合により、それとおして教師と生徒とのあいだに愛が生まれ、ついに結ばれることになる、——このように見ると、ストーリーの大筋はよく似ているのではないか。そして許広平やイライザのような、個性的だが少々向こう見ずで、気性のつよい女性が、洗練された淑女あるいはよき伴侶へと変貌を遂げるのである。つぎには、ヒーローのヒギンズ教授や魯迅師もまた、その過程で徐々に変わり、——少なくとも相手の要望に応じて変わるように努力する。そのような変容のプロセスが実にヒューメインであり、興味深い。『両地書』は単に個人的なドキュメントであるばかりでなく、すぐれた芸術的作品であり、一のロマンと言ってい

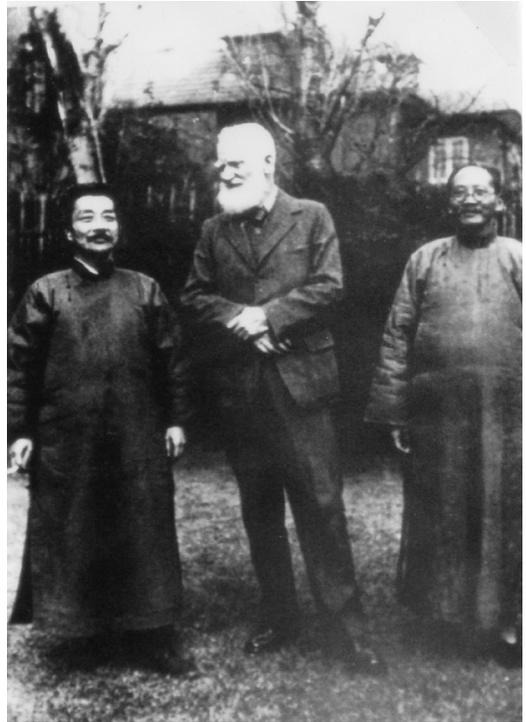


写真3 魯迅、B. ショウ、蔡元培

左から魯迅、バーナード・ショウ、蔡元培

出典：北京魯迅博物館（2003）

宋慶齡（孫文未亡人）宅で行われたB. ショウのレセプションで。上海。1933年

ちなみに、魯迅はB. ショウと会ったことがある。宋慶齡（孫文未亡人）の自宅でのショウを歓迎する午餐の席で。1933年2月17日のことであった。<sup>7)</sup>（写真3参照）ショウは「国外ではあなたは「中国のゴーゴリ」と呼ばれていますよ」と教えた。

#### d) 家族のその後

これまで、魯迅の家庭生活にかんする考え方の一端を述べてきた。周知のように、そして次節でやや詳しく述べるように、彼は死後、毛沢東によって神格化され、偶像化された。むしろそれは彼の意に反することであった。しかし文化大革命の終焉と毛沢東の死（1976年）後、そのような扱いは徐々に変化した。それは魯迅のいわば「脱神格化」＝「人間化」の動きとでもいえようが、この過程は決してスムーズに進んでいるわけではない。魯迅の実像に迫る資料や研究が徐々に解禁され、出版もされるようになった。しかしその過程は全面的なものではなく、テンポも緩慢であるように思われる。ここではその若干の例を紹介してみよう。

愛の勝利者がいる反面、その陰でひっそりと暮らし、耐えてきた女性もいる。朱安である。だが、魯迅が神格化されてきたので、彼女の存在自体がそれに相応しくなく、それゆえ朱安がなお正妻であることは隠されてきた。北京の魯迅博物館には長い間、朱安の居室さえ展示されなかった。

「聖人」にまつわるそのような事実を明らかにすること自体が、当時はタブーであったのだ。

魯迅は、母の強い願望できめた婚約をどうしても断り切れず、そのさい、纏足をやめること、読み書きができ、できれば学校に行くこと、という条件を出して、やむなくそれを受け入れた。だが朱安はどの条件も実行しなかった。朱安は小柄でもの静かな、目上に従順な、古風な女性であった〔三宝政美(1988); 48～49〕。それに対し、許広平は、やや大柄で、断髪の、活発な女性であった〔増田渉(1970); 285〕。彼女が自分の意見をはっきりと言う新しいタイプの女性であることは、『兩地書』を読めばすぐに分かるだろう。ちなみに広平は国民党左派の黨員であり、政治運動につよい関心をもつ女性だった。〔山田敬三(2008); 180〕。

弟作人との不和のため、八道湾の家を出る際、魯迅は、朱安にそのまま今の住居（八道湾）に残るか、または、しかるべき経済的支援を与えるので実家に戻るか、——彼女の意思をたずねた。ところが朱安はそのどちらをもはっきりと断り、どんな家事でも何でもするから一緒に連れて行って欲しいと懇願した。こうして彼は母を入れて三人で、新居（西三条胡同）でも暮らすことになった。

魯迅が突然亡くなったので〔徳永(2016)参照〕、その後母と朱安は、広平から送金される生活費によって暮らすことになった。朱安は、1943年に亡くなった義母を、預託されていたとおり看取ったのち、戦後の1947年に亡くなった。彼女と広平とのあいだには、心の葛藤があったに違いないが、夫の死後、お互いに心をつうじ合うものがあった〔周海嬰(2003); 126 ff〕。

さらに広平は、魯迅亡きあと、彼の遺稿、蔵書などの保管と整理に尽力し、全集の刊行にこぎつけた。彼女の必死な努力がなければ、貴重な文献類は、売却の画策（怪訝なことに、周作人もこれに囁んでいたらしい）や日本軍の略奪やりに合い、散逸されてしまったに違いない。人民共和国が成立（1949）した以降、彼女は全国政治協商会議委員などに選ばれ、公的活動にもたずさわることになり、1968年に亡くなった。魯迅の『回想録』も執筆した。他界する前の1956年に、原水禁世界大会に出席のため広平は初めて来日。その際、藤野巖九郎の墓参を予定したが、体調を崩して来福できず、代参を内山完三に依頼。内山は墓所で追悼文を代読した。彼女は1961年、仙台での「魯迅碑」の除幕式に出席し、挨拶をのべた。こうして生前、もう一度にぜひ日本を訪れたいという魯迅の果たせなかった夢は、夫人によってかなえられた。

## 注

- 1) 小島晉治・丸山松幸(1986) 参照
- 2) 川島真(2010) など参照。
- 3) 北京への移転に伴い、家計の切盛りは、母親から作人の妻信子に移ったが、信子は浪費家であり、ヒステリー気質であったようだ。中国産のものを全く信頼せず、医療から衣料、食品に至るまで、高い日本製品のみを購入した。当然、家計費はかさみ、収入の不足が生じたが、この穴埋めは、もっぱら魯迅の役割であった。作人は、兄の、節約するようにとの苦言に聞く耳をもたなかった。信子の放漫な家計を苦々しく思っていた魯迅は、信子にとって疎ましい存在であり、両者はそりがあわなかった。要するに作人は、この時点で、兄を捨て、妻を選んだのである。なお〔許広平(1968)、飯倉照平(1980)、中島長文(2001); 159 ff、〔劉岸偉(2011); 180～81〕などをも参照。

- 4) 三宝政美(1988); 58 ff.
- 5) 『全集』、13; 496 ff. 解説〔中島長文〕参照。ちなみに29年9月には長男の海嬰かいようが生まれた。彼は喘息が持病で、病弱だった。その医療費もかさんだ。このほか紹興時代のことだが、魯迅は、東京の信子の実家へ各種名目の金銭的支援をしてきたし、末弟建人への援助なども続けてきた〔増田渉(1970); 136〕。
- 6) ここでは『兩地書』原本の通し番号は、【1】のように【 】で括って示す。これによってどの手紙かが参照可能なので、引用のページ数は、原則として省略する。漢字の数字はアラビア数字に改めた。以下、本書はすべて『魯迅全集』、13巻に拠った。
- なお魯迅は、若い友人柔石が官憲に逮捕・殺害されて以来、累の及びそうな手紙を、ほとんどすべて廃棄したと述べている。許との往復書簡を残したのは、やはりそこに強い愛着の念があったからであろう。
- 7) これには、蔡元培、ス מדレー、林語堂らも招かれていた。魯迅は、ショウの訪問に消極的な保守派のお歴々に対して、彼を擁護する一文を寄せている。「SHAW と SHAW を見に来た人々を見る記」という随想がそれで、それを日本語で書いた。この原稿は『改造』の同年4月号に掲載された。〔『全集』、6; 324 f.〕

### 3. 魯迅と藤野巖九郎の死

魯迅の死については、すでにある程度詳しく述べた〔徳永(2016)〕。ここではまだ触れていなかった点についてのみ、手短かに書き足すことに留めたい。

死期を悟った魯迅は、死の直前(1936年9月)、小康状態にあったとき、「死」という題の文章を書いた。その中に事実上の遺書が含まれている。〔『全集』、8; 683~88〕それによれば、香典は原則として受けとってはならず、記念行事は一切おこなってはならない。息子の将来についても、普通の仕事につけばよいのであって、才能がないのを無理に芸術家にしようとしてはならない。総じて、虚礼をやめるなど、きわめて合理的、禁欲的な内容のものであった。それでいて、実際的な注意事項も書かれていた。すなわち、

- 「一、葬式のため、誰からも一文も受けとってはならぬ。——だが、古い友人の場合は、この限りではない。…
- 三、記念行事に関することは、どんなこともするな。…
- 五、子供が大きくなっても、才能がなければ、ちょっとした仕事をみつけて生きていけばよいので、決して中身のない文学者や芸術家になってはならぬ。…
- 七、他人の歯や目を傷つけながら、報復に反対して寛容を主張する人、これには決して近づくな。」

まことに彼らしく淡々として、無欲であり、余計なこと、虚礼にわたるものを決してやって欲しくない、という。死に際しても自分の原則プリンシプルを律義なまでに貫こうとする彼の姿勢をそこにみる。のちに紹介するように、毛沢東が魯迅を「新中国の聖人」と称え、彼を神格化しようとしたのは、全く魯迅自身の意思に反することだったことは明らかである。



写真4 惜別の碑（福井市足羽山公園にある）

説明：惜別の文字是北京博物館にある魯迅の直筆から拾う。背面の格調高い碑文は増田渉（魯迅の愛弟子で「藤野先生」を最初に邦訳した）が草し、土台の揮毫は許広平による。碑のデザインと制作総合は地元の芸術家雨田光平になる。

（筆者撮影）

**藤野厳九郎の死**：すでに見たように〔徳永(2015)〕、彼は敗戦の4日前になくなった。それは古木が倒れ落ちるようであった。死因は老衰とある。その年の数か月前の3月にも体調不良で倒れかけたことがあった。中番の医院から帰宅する際に、下車した三国港駅の付近で、気分が悪くなり、急にしゃがみ込んだことが記録されている。その時夫人が来るまで介抱した少年——もと藤野の患者だった——によれば、「先生の腕は、骨と皮ばかりに痩せていた」という<sup>1)</sup>。老衰と並行して、栄養失調状態だったのではあるまいか。

藤野は、かねがね「田圃〔農地〕は〔作物を〕作る者〔耕作している農民のもの〕でなければならない」と親しい人に言っていたという。〔坪田忠兵衛(1981); 21〕。周知のように、戦前の日本資本主義社会においては、農業問題は一つの根本的な重要課題であった。土地の農民所有化論は、農地改革を断行するわけだから、ラディカルな解決策であり、それゆえ当時においては「危険思想」と見做されていた。ヘンリー・ジョージの土地改革論や孫文の唱えた「土地農有論」がよく知られている。藤野がどのような経緯で上記のような説をいやくようになったのかは詳らかではない。が、おそらく農民の貧しい生活実態をつぶさに知り、その解決策を真剣に考えた結果、自から到達した思想であり、方策であったと思われる<sup>2)</sup>。



写真5 藤野巖九郎記念館 福井県あわら市

もと三国町宿<sup>しゆく</sup>にあった旧居を移築し、資料展示室（奥の建物）を増築。2011年に現在地に移す。

（筆者撮影）

## 注

1) 十一徹朗（2001）

2) ちなみに、藤野は近年の仏教というか寺院の在り方についても、一言思うところがあったという。寺も門徒や檀家の寄進や布施だけに頼るのみでなく、自らも自立の方策を考え、より積極的な布教活動を自ら行うべきだ、という趣旨の主張だったという。彼の一種の合理主義に基づくものと思われる。

## 4. 魯迅に対する評価の変遷

「革命文学論争」：1920年代の後半になると、魯迅は保守派のみならず、若い世代の左翼作家からも批判されるようになった。魯迅は当然これに反論し、こうして「革命文学論争」が展開された。創造社に結集した、郭沫若、郁達夫、成仿吾<sup>せいほうご</sup>らのグループが批判者の中心であった。興味あることは、彼らは、魯迅より数年遅れて日本に留学し、旧制高校をへて九州や東京の帝大というエリートコースをあゆんだ人たちだったことである。その間、日本でマルクス主義の洗礼を受け、帰国後、中国共産党に入党した者が多い<sup>1)</sup>。とくに成仿吾は、日本のプロレタリア文学や福本イズムの影響を受けた。彼は「文学革命から革命文学へ」を旗印として掲げ、福本和夫ばりの難解で極左的な論文をつぎつぎに発表して、注目を浴びた。一例を挙げればこうである。

「我々がもし、さらに革命的インテリゲンチヤの責任を担おうとするならば、もう一度、自

己否定（否定の否定）せねばならぬ。階級意識の獲得に努力せねばならぬ。我々の媒体を労農大衆の用語に接近させねばならぬ。労農大衆を我々の対象とせねばならぬ。」魯迅の階級性について成仿吾はいう。「彼（魯迅）らの誇りは『閑暇、閑暇、第三に閑暇』である。魯迅はこのことからつぎの第五雑感集の書名を『三閑集』と名付け、成仿吾らに「一矢むくいて」いる。」〔『三閑集』『全集』、5、260～261〕

さらにある者は、魯迅は、過去の時代にノスタルジーを感じるだけの小市民の文学にすぎないと決めつけ、次のように揶揄している。

「魯迅という御老台は…いつも薄暗い酒家の楼上から酔眼陶然として窓外の人生を眺めている。…彼はいつも過ぎ去った昔をなつかしみ、没落した封建情緒を追悼しているが、彼のうつしだすのは、結局、社会変動期における落伍者の悲哀である…」。〔『文学批判』創刊号、1928年1月。〔『三閑集』『全集』、5；263～65〕。

「革命文学論争」についてここでは立ち入って論じる必要はあるまい。詳しくは丸山昇（1972）を参照せよ。ただ二つの点だけを指摘するに留めたい。第一に、革命文学の提唱者たちが、文学は革命に対し積極的な役割を果たすものでなければならないという観点（いわば革命の起爆薬・促進説）に立っているのに対し、魯迅は、文学はあくまで革命のあとに生み出されるものであり、それに先行し、その勃発に直接役立つものではない（革命に対する非貢献説または内省・反映説）という立場をとっている。<sup>2)</sup>

第二に、魯迅はこの機会に、相手の理論の浅薄さ、偏狭さを批判するために、マルクス主義関係の文献を多量に収集し、みずから改めて勉強していることである。彼の日記の末尾には、「書帳」として購入した本の書名が記録されている〔『全集』、15；234〕。1928年には日本、ソ連からマルクス主義関係の書物を多量に購入したことが判る。プレハーノフの芸術論は自から翻訳し、出版した（1930年）。この時期に魯迅はマルクス主義ないし唯物史観に最も接近したといえるだろう。しかし従来の思想を捨て、マルクス主義にシフトしたとは明言していない。**従来の偏りを正すことができた**という。正確には、次のように述べている。創造社らの連中がみな私を非難、攻撃したが、

「一つ創造社に感謝しなければならないことがある。彼らに「おし」つけられて、いくつかの科学的文芸論〔マルクス主義芸術論のこと—引用者〕を読まされたため…〔これまで〕糸口のつかめなかつた疑問が解けたからだ。しかも、おかげで一冊、プレハーノフの『芸術論』を訳した結果、進化論だけを信じるわたしの——わたしのせいで他人にもおよんでいる——**偏向を正すことができた**。…」〔『三閑集』、『全集』、5；200〕

さて、このような左翼作家同士の激しい対立、相互不信の状態は、党中央の憂慮するところとなり、その指導の下で左翼作家連盟（左連）が成立した（1930年）ことは周知のとおりである。魯

迅は、これまでと違って、同連盟の設立発起人を引き受け、事実上、その指導者となった。

しかし左連はわずか5年後の、1935年に解散した。背後にコミンテルンの意向があったといわれ、魯迅はこうした解散にはむしろ反対だったという。

魯迅の葬儀は、彼の事実上の遺言（本稿49ページをみよ）に反して盛大に行われた。彼の民衆の間における人気、名声は絶大であった。毛沢東は葬儀委員の一人であったが、当時それは秘密とされ、したがってメディアに彼の名前がでることはなかった。

毛沢東の魯迅に対する評価は、端的にいえばアンビヴァレントなものであったと考える。彼は、魯迅の文学作品——、とくに権力に屈することのない批判的精神、中国固有の文化の巧みな伝承と発展、民族精神に根ざしている独自の見方の結晶など——を高く評価し、魯迅の作品をよく読み、愛読していた。たとえば建国直後の1949年12月、初めてソ連を訪れた時、毛は魯迅全集数冊を携帯し、しばしば読書に耽り、食事を忘れるほどだったという〔長堀佑造(2011); 359~60, passim〕。スターリンとのタフな交渉に臨み、魯迅の作品が民族的な後ろ支えの力を毛に与えたのだろうか。

同時に、毛は魯迅の、匕首のような鋭い批判の刃が党内に向けられ、党内秩序が混乱状態に陥ることを恐れたふしがある。他方、毛沢東には、魯迅の名声、影響力、批判精神を極力共産党の側に保留し、独占することによって、いまだ延安にあってマイナーな存在であった党の地位を向上し、勢力の拡大に繋げたいといういわば「政治的意図」もあったにちがいない。アンビヴァレントである所以である。

毛沢東は魯迅逝去二周年記念日（1938年）にあたり延安で行った講演のなかで、魯迅精神の要をつぎの三点、すなわち、①政治的遠見、②闘争精神、③犠牲的精神、に要約しながらこう述べている。

「魯迅の中国における価値は、わたくしのみるところでは中国第一等の聖人だ。孔夫子は封建社会の聖人だが、**魯迅は新中国の聖人だ**」〔毛沢東(1946)〕

至高の讃辞が与えられていると言っていい。さらに2年後に発表された『新民主主義論』（1940）では、つぎのように高い評価が与えられている。

「魯迅は中国文化革命の主将であり、彼は偉大な文学者であったばかりでなく、また偉大な思想家であり、偉大な革命家であった」〔毛沢東(1954); 123~4〕

こうして魯迅の神格化が始まった。講演のなかでも毛は、魯迅が共産党員ではないと断っているが、非党員の彼をこのように称賛するのは、破格の取り扱いと言うべきだろう。

さて、周知のように、第2次世界大戦は1945年に終わり、そのあと内戦を経て1949年人民共和國が成立した。神格化された魯迅評価は、その後どのような経過をたどるのだろうか。以下、スペースの関係上、ごく限られた事例を紹介し、コメントすることにしたい。

## A) 「もし魯迅がいま生きていたら」論争

今からもう 60 年も前の話である。1957 年 7 月毛沢東と上海の文化人との懇談会（出席者約 40 人）が開かれた（その会議がそもそもあったのかどうか、までが論争のタネになった）。その席上翻訳家として有名な羅稷南<sup>らしよくなん</sup>が「もし魯迅がいま生きていたら、彼はどうなったのでしょうか」と主席に質問したのである。参加者たちはこの大胆で、率直な質問に驚いた。なぜなら党の政策がこの年に一転し、穏健な「百家争鳴」政策からイデオロギー統制をつよめる、厳しい「反右派闘争」へ転換し始めた時であり、<sup>3)</sup> 彼ら文化人たちは皆ナーバスな状態におかれていたからである。

毛沢東はしばらく考えていたのち、こう答えたという。「魯迅か。——牢屋に入れられてもまだ書き続けているか、または一言も言わないか、（どちらかだろう。）」と。この答えを聴いて、一同は激しい戦慄をおぼえた。かつて魯迅を「新中国の聖人」と称えた本人自身が一転して、党の文化政策に逆らう者なら、たとえ魯迅といえども容赦なく、自由を奪われることになる、と昂然と言いつつ放ったからである。従来の魯迅評価とは 180 度異なる、むごい評価がなされたのである。

共産党が全権力を掌握した以上、すべての人民はその統治機構のもとに組み込まれ、直接的か間接的かの区別はあれ、そのルールに支配し拘束されるのである。「新中国の聖人」であっても、その例外ではない。毛の魯迅に対する関係は、もはやアンビヴァレントという心理的次元の関係で捉えるだけでは不十分である。政治的な支配者と被支配者の関係としても捉えなければならないのである。政治とはかくも冷酷なものであることを、このエピソードははっきりと物語っている。

懇談会の内容は公にされなかった。それが一般に知れわたったのは、周海嬰が魯迅の伝記『わが父 魯迅』（原本は 2001; 邦訳 2003）を出版してからである。この伝記の「追記」の中で著者は大いに逡巡したのち、この「秘話」を書き加えることにしたと記している。事件のあった時からおよそ半世紀の後のことである。それはかなりの反響を呼んだようだ。会合の存在事実自体を否定する歴史家が何人か現れ、毛沢東を弁護する役割を演じた。他方、こうして論争が起こるなか、この会合に出席していた有名な女優黄宗栄が、勇気を奮って覚え書きを公表し、毛沢東の発言が実際にあったことを明らかにした。これで論争の、中枢部分の事実が存在したことについては一応決着がつく。<sup>4)</sup> [代田智明(2004), 田畑佐和子(2009), 長堀佑造(2011)] などをも参照。

## B) 魯迅の思想はどのように位置づけられるのか。

この問いについて正面切って論じるとすれば、少なくとももう一篇の論文を用意しなければならないし、他方、与えられた紙数はすでにはるかにオーバーしている。そこで以下では、二つの論点を指摘するに留めて、その詳しい検討は今後の課題とすることにした。

周知のように、魯迅については、様々な論者によって多数の肩書き、ないし規定が与えられている。すなわち、革命的戦士、革命的作家・文学者、詩人、進化論者、人道主義者<sup>ヒューマニズム</sup>、啓蒙家、教育者などなど。それらは彼の多面的活動の一面を表していることは言うまでもない。が、ここでその種の議論を蒸し返す余裕はない。

これらの規定に関連して、彼はごく普通に考えられているように、マルクス主義者ではない、いわんや中国共産党員ではない、ことを明確にしておきたい。これが第 1 の論点である。魯迅は、劇

作家姚克<sup>ようこく</sup>あての手紙（1933年11月15日）で、こう書いている。

「わたし自身なんかも、経済学などわかるわけでもなければ、宣伝の文章なども見たこともなく、『資本論』は目を通したこともなく、手をふれたことさえありません。」〔『全集』、15; 189〕。<sup>5)</sup>

だからたとえば、高 晃公のように、魯迅を単純に毛沢東思想の系譜のなかに位置付け、両者を直線で結びつけるのは明白な誤りである。〔高 晃公(2007)〕それでは両者の間にある重大な違いを看過する結果になる。<sup>6)</sup> 魯迅は、結局、文学の真髄を求めその独自性を主張し、したがって政治による支配、指導という名による個人の抑圧、表現の自由の制限を断固として拒否する態度を貫きとおした。これに対し毛沢東は、政治の優位性、党の文化政策の絶対性を主張したのである。これら二つは、互に接点はあるものの別の原理によって駆動され、運用され、営まれているのである。

マルクス主義者の系譜でないとするれば、魯迅をどう捉えればよいのだろうか。これが第二の論点である。大まかにいえば、ヒューマニストの流れないし系譜に属すると筆者は思うが、それではあまりにも広すぎる概念であり、漠然としている、という反論があろう。むろんたんなる人道主義者ではない。人道主義プラス・アルファであり、ことの本質によっては革命的変革を容認し、辞さない人道主義者なのである。

これに関連して、山田敬三は、つとに魯迅が「自覚なき実存主義者」であるという説を提起している〔山田敬三(1977、2008)〕。これは更に検討に値する命題だと思う。さし当たって筆者にはつぎのような諸点が思い浮かぶ。

- i. 魯迅が青年期にニーチェに深く沈潜したことかあり、ニーチェの思考様式がなお幾ばくか基底において残存しているのではないか。彼の寂莫感、神なき後の人間の不安感、「羅針盤の喪失」等々、人間が自由を獲得したことの代償ではなかろうか。
- ii. 莊子は魯迅の若いときの愛読書であった。郭沫若はこのことを詳しく考証しているという〔山田(1977); 34〕。莊子は、福永光司がいみじくも「古代中国の実存主義」者にとらえたように〔福永光司(1964)〕、まず大命題の正しさを明らかにし、それを前提に現実を捉えるのではなく、現実的存在にこそ本質がり、後者は前者に先立つものである。人間の主体性こそが重要である。莊子の思想をこのように現代風に捉えなおしてみると、それは実存主義の源流にあたり、魯迅の思想も大筋ではこの系譜のなかに位置づけられるのではなかろうか。これはまた、かの「人は生きなければならぬという「生物学的信念」の、別の表現であるとも言えよう。
- iii. サルトルによれば、ヒューマニズムと実存主義とは相互に矛盾するものではない。両者の共存は可能であるとしている。(ただしサルトルらの議論にはまだいくつかの理解できない論点が残されていると思う。)

以上の点は、魯迅を中国的な実存主義の系統において捉えうる、と考える若干の理由である。

が、まだたんなる状況証拠であるにすぎない。また、山田敬三が的確にも述べたように、魯迅自身はそう主張したわけではなく、あくまでも「自覚なき」<sup>7)</sup>ものなのである。このテーゼを十分に検討することは、今後に残された課題である。

## 注

1) たとえば郭沫若の場合には、河上肇からの影響が大きかった〔高 晃公(2007); 210〕。なお、河上が京大を追われた(1928年)のち、『資本論』を学びたいと思う中国人留学生たちは、東北大学の宇野弘蔵のもとでマルクス経済学を学ぶことが多かったようである。由其民「七十年前の日中師弟縁—宇野弘蔵先生の追憶」(解説:柴垣和夫)、『中日関係史研究』、2007年2期所収を参照。

郁達夫は1913年来日し、東京帝大経済学部に入學。1922年に同学部を卒業。留學中から郭來者らの創造社の設立に加わり、文學活動を本格化する。成仿吾は、1910年来日。六高を経て東京帝大工学部に進み、中退。創造社の結成に加わりその理論の中心的存在となる。彼は魯迅の文學の特質を「趣味中心の文芸」、「小天地における自己欺満の自足」にすぎない、と決めつけた。

2) 魯迅の主張については、ごく簡単には「革命時代の文學—黃埔軍官學校での講演」。〔『全集』、5; 23ff.〕をみよ。

3) 党中央は1956年、「百花齊放、百家争鳴」のスローガンのもと、自由で創造的な議論を行うことを奨励しながら、あまりにも多く党に対する批判が噴出したため、1年足らずでこれを中止。翌年から一転して「反右派闘争」を展開した。多くの知識人、作家らが右派として批判、肅清の対象になった。なかでも黨員作家・胡風——彼は慶応大学で英文學を学び魯迅の信賴が厚かった——の場合・「胡風事件」が有名。(これについては、梅 志著、関根謙訳『胡風追想 往事、煙に如し』、(1991)東方書店を参照)。なお党文化担当者の間では、魯迅の作品を右派と見做し批判の対象とすべきだとする意見が有力だったという〔長堀佑造(2012)〕。こうした状況からすれば、胡風は、ある意味で魯迅の身代わりに批判されたともいえよう。

4) 事実として会合の存在が認められたとしても、このエピソードが含意している問題はきわめて大きい。文學者の表現の自由と政治的支配者の統治権とのあいだの緊張・対立は、かつてないほど強いものである。

5) 魯迅が『資本論』を読んでいないということは、増田渉も直接聞いている〔増田渉(1970)〕。

6) 魯迅と毛沢東の違いを際立たせる例として、「富田事件」が挙げられよう。富田事件とは、江西省富田にあった紅軍第一方面軍(書記・毛沢東)が内部のいわゆるAB(アンチボルシェビキ)団を解体、一掃するために行った肅正である。しかしそのさい逮捕、拷問など過酷な手段により、多くの冤罪が生み出されたのであった。このため「反革命分子」として虐殺された幹部、兵士や農民はおよそ2万人(別の説では7万人)にも達したと言われている。〔韓鋼/辻康吾(2008); 9~12; 176〕

魯迅はこの噂を耳にして、「農民を殺すのはたとどんな動機からであろうとよくない、…(調査して)もし本当なら共産党に殺しちゃいけないと忠告することを決心した。…」と増田に語っている。〔増田渉(1970); 61~62、長堀佑造(2012); 294 ff.〕要するに、毛沢東は杜撰な調べに基づいて大量殺戮を行った責任者であり、他方、魯迅はどんな理由であれ農民を殺すのはよくない、という意見であった。ちなみに中国共産党正史は、いまだにこのような汚点をはっきりと訂正し、責任の所在を明確にできていない。〔韓鋼/辻康吾、(2008)〕

7) 魯迅自身は、すでに述べたように自分の性格、性向を自覚している。だからあげ足とりになるが、全く「自覚なき」というのは、正確ではなかろう。より正確には自覚していたが、それを実存主義という概念として捉えていなかったというべきだろう。

## 5. エピローグ

2010年という年は、日中関係のみならず、世界史的に見ても注目すべき年であったと記憶されるであろう。この年に中国のGDPは日本を抜き、合衆国について世界第2位の規模の「経済大国」となったのである。軍事力を考えれば、中国がまぎれもなくグローバルな<sup>スーパーパワー</sup>超大国であることは否定できない。かつて郁達夫は自伝的小説『沈淪』(1922)の主人公に、「中国よ！ 中国よ！ お前はなぜ強大にならないのか？」と叫ばせた。中国が弱小国であるがゆえに、日本女性に無視されたと思ひ込み、深い屈辱感を味わった結果、ほとぼしり出た彼の<sup>イノセント</sup>素朴な願いであった。〔今村与志雄(1990); 100~2〕など。今日、郁達夫のかつての願望はほぼすでに叶えられたといえるだろう。

では、魯迅がかねてから抱きつづけた中国社会を根本的に改革しようとする課題についてはどうだろうか？ その後幾多の改革が行われ、とくに経済面、軍事面では著しい成果が見られたのは事実である。そしてなによりも半植民地・従属国体制からの解放、独立の達成があった。だが、いぜんとして未解決のまま残されているものも少なくない。《皇帝》制にも擬せられる権力集中型の統治機構、一党独裁制、腐敗と縁故関係重視との癒着、さまざまな格差の拡大、人権・環境保全の軽視ないし無視、法治主義のもとでの「人治主義」的法制の実態、<sup>1)</sup>少数民族問題などなど。——ざっと考えただけでもこのような難問が横たわっている。魯迅が心に描いていた改革の構想は、なお未完であり、十分実現されたとは言えない。

彼はおそらく郁達夫とは違って、現代中国社会を、無邪気に肯定し、心底称賛することはしないだろう。その外面的な著しい変貌ぶりに目を見張りつつも、他方、内面的には、依然として旧い社会の精神構造が根強く残存しており——これが「狭隘な民族主義」や、さらには「強国」という名の「覇権国家」への道を助長する基盤として利用されていること——を見落とさないだろう。そして「もし魯迅がいま生きているならば」、それを思うにつけ、ときに寂寞な心境になるのではなからうか。だが、不屈な批判精神の彼は、自分の納得できないことには異を唱え続けるに違いない。たとい牢に入れられたとしても。

### 注

1) ここでは触れることができなかったが、現代中国では法治主義ははまだ確立しているとは言えず、政治・行政は優れた立派な人物——かつては皇帝、現代では党エリート層——が行うという徳治主義・人治主義がふたたび有力視されている。政治的誤りは指導者個人の次元で捉えられるが、それは構造的なものに根ざしているという観点を欠く。だから失脚は、多くの場合、当事者の全人格の否定、犯罪者扱いとならざるを得ない。一般個人の政治参加、異なる意見の撰取、政治活動・改革への参加は、認められないか、著しく制約されている。それどころかしばしば反動的行動として処罰される。〔R. エドワーズほか(1990)〕など。この点に関連して、「中華人民共和国憲法」(1954年制定)には、つぎの諸規定が定められていることを銘記すべきである。「人民法院〔裁判所の意味〕は独立して裁判を行い、法律にのみに従う」(78条)、「中華人民共和国公民は、法律上一律に平等である」(85条)、「言論・出版・集会・結社・行進・示威の自由」の保障(87条)、「公民が科学上の研究、文学・芸術上の創作およびその他の文化活動を行う自由を保障する」(95条)ことなど。〔宮沢俊義(1960); 317~319〕

《参考文献》

- 板倉照平（1980）『魯迅 人類の知的遺産』、講談社
- 泉彪之助・藤野 明監修（2003）『魯迅と藤野巖九郎 日中友好の絆 百年前の出会い』、福井県あわら市/あわら市教育委員会
- 石川禎浩（2010）『革命とナショナリズム 1925—1945 シリーズ中国近現代史③』、岩波新書
- 伊藤虎丸（1975）『魯迅と終末論 一近代リアリズムの成立一』、龍溪書舎
- 同（1983）『魯迅と日本人 アジアの近代化と「個」の思想』、朝日新聞社
- 今村与志雄（1967, 1976）『魯迅と伝統』、勁草書房
- 同（1982）『魯迅と1930年代』、研文出版
- 同（1990）『魯迅の生涯と時代』、第三文明社
- ランドル・エドワース、ルイス・ヘンキン、アンドリュウ・ネイサン著 斎藤恵彦、興梠一郎訳（1990）『中国の人權—その歴史と思想と現実と』、有信堂、
- 大河内一男（1952）『黎明期の日本労働運動』、岩波新書
- 大内秀明・平山昇（2014）『土着社会主義の水脈を求めて 一労農派と宇野弘蔵一』、社会評論社
- 川島 真（2010）『近代国家への模索 1894-1925 シリーズ中国近現代史②』、岩波新書
- 韓 鋼著・辻康悟編訳（2008）『中国共産党史の論争点』、岩波書店
- 北岡正子（2001）『魯迅：日本という異文化のなかで 弘文学院入学から「退学」事件まで』、関西大学出版部
- 同（2006）『救亡の夢のゆくえ—悪魔派詩人から「狂人日記」まで』、関西大学出版部
- 同（2015）『魯迅文学の淵源を探る 「摩羅詩力説」材源考』、汲古書院
- 許 広平（1968）『魯迅回想録』、松井博光訳、筑摩書房
- ポール・ケネディー・鈴木主税訳『大国の興亡』（1988）、上、下巻、草思社（邦訳には注が省略されているので以下の原書で補う。Paul Kennedy（1987,1989）*The Rise and Fall of the Great Powers: Economic Change and Military Conflicts From 1500 to 2000*. NY. 1987. Radom House.
- 小島晉治・丸山松幸（1986）『中国近現代史』、岩波新書
- 佐藤慎一編（1998）『近代中国の思索者たち』、大修館書店
- サルトル、J-P. 伊吹武彦他訳（1996）『実存主義とは何か』、増補新装版、人文書院
- 三宝政美（1988）『悩める家長：魯迅』、日中出版
- 高 晃公（2007）『魯迅の政治思想 西洋政治哲学の東漸と中国知識人』、日本経済評論社
- 周 海嬰（2003）『わが父 魯迅』、岸田登美子、瀬川千秋、樋口裕子訳、集英社
- 周 作人（1966）『周作人随想』、松枝茂夫訳、富山房
- 代田智明（2004）『ロシナンの影—「もし魯迅がいま生きていたら」論争ノート—』、『中国研究月報』58巻8号
- 同（2006）『魯迅を読み解く 謎と不思議の小説10篇』、東京大学出版会
- 高見沢 磨・鈴木 賢（2010）『中国にとって法とは何か—統治の道具から市民の権利へ—』、岩波書店
- 田畑佐和子（2009）『黄宗棠 「私は親しく聞いた—毛沢東と羅稷南の対話」、——翻訳と訳者の付記』、『中国研究月報』63巻1号所収
- 竹内 好（1961）『魯迅』、未来社
- 同（1976）『新編 魯迅雑記』、勁草書房
- 土田 誠（2013）『医師 藤野巖九郎』、あわら市日中友好協会
- 坪田忠兵衛（1981）『郷土の藤野巖九郎先生』、藤野巖九郎先生顕彰会
- 十一徹郎（2001）『宿佐ノ池の藤野巖九郎先生』、『みくに今昔あれこれ』、その六 所収、三国今昔懇話会刊
- 中島長文（2001）『ふくろうの声 魯迅の近代』、平凡社

- 中野美代子 (1980) 「魯迅の日記改訂」、『人類の知的遺産』、第 69 卷、講談社、「月報」第 32 号所収
- 長堀佑造 (1992) 「魯迅とトロツキー その一断面」、魯迅論集編集委員会編『魯迅研究の現在』a) 所収、汲古書院
- 同 (2012) 『魯迅とトロツキー 中国における「文学と革命』』、平凡社
- 福井テレビ (2004) 『魯迅 その生涯 一海を越えて一』、福井テレビ
- 福永光司 (1964) 『莊子 古代中国の実存主義』、中公新書
- 藤野巖九郎先生顕彰会 (1986) 『藤野巖九郎記念館写真集 第 1 集』、藤野巖九郎先生顕彰会
- 藤野先生と魯迅刊行委員会 (2007) 『藤野先生と魯迅一惜別百年一』、東北大学出版会
- 藤野恒三郎 (1970) 『学悦の人』、大阪大学微生物研究室、藤野恒三郎教授退官記念
- 藤野恒道 (1956) 「藤野先生小伝」、『中国文学報』、四冊、京都大学文学部中国語中国文学研究室
- 藤野恒男 (1994) 「藤野巖九郎小伝」、『仁愛女子短期大学研究紀要』 26 号所収
- 藤森節子 (2014) 『そこにいる魯迅—1931~1936 年』、積文堂出版
- 北京魯迅博物館 (2003) 『魯迅的読書生活』[写真集]、人民日報出版社
- 増田 渉 (1967) 『中国文学史研究—「文学革命」と前夜の人々—』、岩波書店
- 同 (1970) 『魯迅の印象』、角川書店
- 松波信三郎 (1962) 『実存主義』、岩波新書
- 丸尾常喜 (1985) 『魯迅 花のために腐草となる』、集英社
- 丸川哲史 (2010) 『魯迅と毛沢東 中国革命とモダニティ』、以文社
- 丸山 昇 (1965) 『魯迅 その文学と革命』、平凡社
- 同 (1972) 『魯迅と革命文学』、紀伊国屋新書
- 同 (1976) 『ある中国特派員 一山上正義と魯迅』、中央公論社、改訂版 (1997)、田畑書店
- 宮沢俊義 (1960) 『世界憲法集』、岩波文庫
- 毛 沢東 (1940/54) 『新民主主義論』、毛沢東選集刊行委員会訳、同刊行会
- 同 (1946) 「魯迅論」、波多野乾一訳、『中国文学』、第 46 号 6 月号所収
- 山田敬三 (1977) 『魯迅の世界』、大修館書店
- 同 (2008) 『魯迅 自覚なき実存』、大修館書店
- 山本正雄 (2006) 『藤野先生と魯迅の思想と生涯』、勝木書店
- 横山宏章 (2002) 『中華思想と現代中国』、集英社
- バートランド・ラッセル (1970) 市井三郎訳『西洋哲学史 3』、みすず書房
- 李 長之 (1990) 『魯迅批判』、南雲智訳、徳間書店、(原本 3 版 [1936] の邦訳)
- 魯迅 (1984~86) 『魯迅全集』、全 20 巻、学習研究社
- 魯迅論集編集委員会 (1992) 『魯迅研究の現在』、a) 汲古書院
- 同 (1992) 『魯迅と同時代人』、b) 汲古書院

\* \* \*

Bonnie S. McDougall (1971) *The Introduction of Western literary theories into Modern China.*, The Centre for East Asian cultural Studies, Tokyo

《付記》本稿の作成に際し、福井県立大学図書館所蔵の「魯迅研究関連文献・資料」を利用できたことは、僥倖であった。長年、これらの文献の収集にご尽力された泉彪之助名誉教授の貢献に対して、心から敬意を表したい。文献の閲覧については三嶋義之・同図書館副館長に引き続きお世話になった。また草稿に目を通し、有益なコメントをくださった鈴木和雄、富田義典両氏に感謝する。最後になったが、本稿作成中、折につけ声援してくれた畏友戸塚秀夫氏が亡くなった。彼のコメントを聞く機会が永遠に失われてしまったことは残念でならない。

## Lu Xun and Prof. Fujino

— An Aspect of Japanese and Chinese Relations (Part II) —

TOKUNAGA Shigeyoshi

First, the author pointed out that Lu Xun was especially influenced by such Japanese men of letters such as Saito Nonohito. Writing his early important theses during his later period of staying in Japan, Lu Xun's interest was concentrated on assimilating the poetical school of romanticism such as Byron, and the German philosophy of idealism as represented by F. Nietzsche. It is somewhat a surprise that he had no interest in socialism and social movements at this stage, considering his later activities.

*In Two places* (「兩地書」) was compiled the letters between Lu Xun and Xu Guanpin, (許広平) Xun's student, later his wife. Answering Guanpin's questions, he wrote frankly his views on various kinds of problems, including his character, philosophy, Chinese political and literary situations. It was rare to publish their "love letters", while they were both still alive. Lu Xun had his legal wife, Shu An (朱安) in Peking. But their marriage was against at least Lu Xun's own will, according to the custom of the times. In fact his mother had decided it. Lu could not divorce Shu An. Publishing *In Two Places* had the meaning and evidence to explain and make clear **their true and sincere love**, not to cause scandal.

Mao Tsetung (毛沢東) used to read Lu's works: especially Lu's character of struggling, spirit of self-sacrifice and political foresight were highly evaluated by Mao. Just after Lu's death Mao Tsetung praised Lu Xun as a "*modern saint of China*".

However, Mao's evaluation of Lu Xun had changed drastically after the establishment of New China (1949). In 1957 at small scale meeting of writers in Shanghai, Mao replied, "Lu Xun was still writing in a jail; or he was silent knowing the situations well." In short Mao's attitude to Lu Xun is ambivalent.

Many titles have been given to Lu Xun, *e.g.* revolutionary writer, radical man of letters, humanist, poet. He had never thought himself to be Marxist, though people usually thought him to be so. If the author dare say, Lu Xun is a humanist and/or an *existentialist* in a sense of Chinese classics, though here the author is not able to examine the matters fully.